

歴史に残る鉄砲戦：長篠の戦い

1575 年の長篠の戦いは、おそらく 16 世紀から 17 世紀にかけての最も有名な鉄砲戦である。この戦いは、当時まだ比較的新しい武器であった火縄銃の戦術的価値を証明し、戦争のあり方を変えるきっかけとなった。

戦いの舞台は、現在の愛知県北設楽郡設楽原である。武田勝頼（1546-1582）は、武田信玄（1521-1573）を父に持ち、当時最も強力な軍隊を築いていた。対するは、織田信長とその臣下で後に将軍となる徳川家康（1543-1616）の連合軍である。勝頼軍は徳川の同盟国が所有する城を包囲し、信長と家康はその包囲を破ろうとしていた。

一般的な説では、信長軍 3000 人の鉄砲隊が勝負を決めたとされている。信長は型破りな名将として知られ、火縄銃を積極的に取り入れた。信長は、城の反対側の柵の後ろに鉄砲隊を 3 列に並べ、武田軍の精鋭騎馬隊を引きつけて砲撃を仕掛けた。連射された鉄砲隊は、刀や槍を持った騎馬兵をなぎ倒し、信長と家康は勝利した。